

生物名のカタカナ表記への括弧書き漢字付記の提案

川井正雄*

1. はじめに

生物種を示すための最も正確で確実な方法は、世界共通の名称である学名を用いることである。学名は、それぞれの生物分類群ごとに国際的に定められている命名規約に従ってラテン語で記載される。しかし、実用的な面からは、日本人にとっては生物名が日本語で書かれている方がはるかにわかりやすく便利である。日本語の名称、すなわち和名は、我が国における通称、慣用名であるが、学術書や教科書類では和名はカタカナ表記されており、一般的にも生物名はカタカナで書かれることが多い。本誌の執筆要領にも「生物名：和名の場合はカタカナ、学名はイタリック体にする。」と明記されている。

カタカナによる表記には長所とともに短所もあり、本稿では、適宜カタカナ和名の後に漢字を括弧書きで付記することによってその短所を補うことを提案する。

2. カタカナ表記の長所

和名をカタカナ表記することの利点は、まず、地の文の中から生物名が容易に認識できることである。さらに、生物名をカタカナで表記することによって、文脈の中でその語が生物学的な位置づけで記されていることを示すことができる。「人」と「ヒト」では意味合いが大きく異なり、後者は学名の *Homo sapiens* L. に相当する生物種として扱われていることを示している。

和名は必ずしも標準化された唯一の名称であるとは限らないが、カタカナ表記される名称が学名との一対一の対応がついていけば標準和名といった性格を有する場合も多い。したがって、電子媒体を用いての検索に頼ることも多い現在では、カタカナ名称は検索、整理、情報処理などに極めて有効な表記法であるといえることができる。

3. カナ書き生物名の欠点

和名は、単に生物種どうしを区別するためにつけられた無意味なタグとは性質を大きく異にする。人々によって古くから言い習わされてきた呼び名であれ、新しく生物学者によって命名されたものであれ、その生物の性質や特徴、あるいはその生物と人々との関わりなど、その生物についての何らかの情報が含まれてい

る。しかし、日本語は同音異義語が多いため、キ（木、黄）、シマ（島、縞）、チョウ（鳥、蝶）、ナミ（並、波）など、カナ表記では区別がつかないことが多い。ナミアゲハ、ナミテントウなどのナミは波線の模様を意味するものではなく、並であって、その昆虫の仲間の中でありふれた普通種であることを示している。ハクセンシオマネキ（白扇潮招）という蟹は、大きい片方の鉗脚を振り上げる様子を扇に見立ててつけられた名前であるが、白扇ではなく誤って白線と思っている人も居る。単純にすべてをカナ書きすれば、名前が意味する情報が表面から消えてしまう。その生物名にまつわる伝承やその名前にこめられた命名者の思いを十分に伝えることができないのは、カナ書きの重大な欠点であろう。

4. かつこ書き漢字付記の提案

カタカナは表音文字に過ぎないが、表意文字である漢字には様々な情報が含まれており、漢字名から形や色や性質が伝わってくることは多い¹⁾。しかし、図鑑類をはじめとして、動植物園の説明板等でも、漢字の生物名が明記されている場合は決して多くはない。

例えば、小学館のフィールド・ガイドシリーズ²⁾では、ハシブトガラス【嘴太鴉、嘴太鳥】、ベニマシコ【紅猿子】のようにカタカナ名の後に漢字が示されているが、カタカナ名だけの図鑑の方がはるかに多い。また、敦賀の中池見湿地に向かう歩道沿いのコハウチワカエデの幹には、カタカナ名とともに漢字書きの小羽団扇楓、学名、科名を記した板が取り付けられている³⁾が、このように自然公園内や自然歩道沿いの樹木に植物名がカナ書きとともに漢字も記されている例は少ない。

生物名のカタカナ表記が十分に定着、一般化している現状では、必要に応じカタカナ名の後に括弧書きで漢字を付記するのが、カナ書きの長所を維持しつつ、その欠点を補うための一つの有効な方法であると考えられる。すでに折りにふれて提唱してきたこの漢字付記の私案⁴⁾であるが、ここであらためて紹介することとして、その有用性を示すため、以下に漢字付記の例を列挙する。

コウヨウザン（広葉杉）はカタカナでは意味不明かも知れないが、漢字があれば、まさに読んで字のごと

*中之島科学研究所

しである。顔の中央部の縦縞が白い鼻のように見えるハクビシン（白鼻芯）、体内に生じて排泄される異物が抹香に似た香気を持つマッコウクジラ（抹香鯨）、絶滅が危惧されるシダ科の水草で4枚の葉が田の字の形のデンジソウ（田字草）などは、漢字を添えることによってその生物種のイメージがよく伝わる。また、武庫川流域の溜め池に多く見られ葉が車輪状に出ているシャジクモ（車軸藻）は、漢字があればクモ（蜘蛛）ではなく藻類であることが自明であるとともに、その形態も連想することができる。湿原のラン科植物で絶滅危惧種のトキシソウ（朱鷺草）、サギソウ（鷺草）は鳥の形に似た花を咲かせる。その他、自然林に見られるウリハダカエデ（瓜膚楓）、ネジキ（楳木）、早春の野に咲くジシバリ（地縛）、ショウジョウバカマ（猩々袴）、夏草のオトギリソウ（弟切草）、コマツナギ（駒繫）、浮葉植物のガガブタ（鏡蓋）など、生物相が豊かな武庫川周辺では、漢字付記がふさわしい植物は枚挙にいとまがない。

難読文字に対して新聞などではルビが付けられているように、意味のわかりにくい生物名に漢字を添えるというのが本提案である。同じ生物名が何回か出てくる場合は、漢字付記は最初だけで十分である。カタカナが多過ぎると無味乾燥な感じがするが、逆に漢字が多過ぎると煩わしいので、漢字付記の採否は執筆者が状況に応じて判断すればよいであろう。

5. 漢字表現の多様性

和名は種ごとにその由来、背景は多様で、実際に漢字付記を適用する場合、その採否や選択は単純ではない。対応する漢字が存在しない場合には当然付記はないが、漢名と和名の漢字書きの両方が可能なカマキリ（螳螂/鎌切）などの場合や、由来が定かでないなど種々の理由で複数の候補が存在する場合、常用漢字にない難しい字の場合など、状況は多様で一義的に書き方を定めることは不可能であり、複数名を併記するという選択肢もあり得る。表記の統一よりは、状況に応じた柔軟な対応、選択が、漢字付記の目的にはふさわしい。付記そのものの有無をはじめ、送り仮名や助詞の有無、漢字仮名混じり表記なども含め、次の例のように書き手の選択に委ねればよいであろう。例：ユズリハ（譲葉/譲り葉）、カゴノキ（鹿子木/鹿子の木）、ネキトンボ（根黄蜻蛉/根黄トンボ/根黄とんぼ）

漢字表現の柔軟性を有効に利用する方法として、生物の種類、分類を示す文字を最後に加えることも一案である。例えば、スズメ目の小鳥ベニスズメ（紅雀）と同一の和名を持つスズメガ科の昆虫が存在するが、蛾の文字を加えてベニスズメ（紅雀蛾）とすることによって混乱を回避することができる。同様に、サシガメ（刺亀）はカメムシ（亀虫）目サシガメ科の昆虫の総称でカメ（亀）と紛らわしいが、例えば、アカシマサシガメ（赤縞刺亀虫）と虫の字を加えれば、カメの

1種との誤解を避けることができる。同様に、植物と魚類が同名のカマツカも生物の種類を明示する目的で（鎌柄木）あるいは（鎌柄魚）と付記することが考えられる。

6. おわりに

以上、カタカナで表記される生物名に続いて括弧付きで漢字を付記することを提案した。広く漢字付記が普及する場合、括弧書きは普通の（ ）ではなく、生物名への追加情報であることを明示する意味では、[], 【 】, 《 》などの特殊な括弧の中からいずれかを指定して用いる方が望ましいであろう。漢字が添えられている図鑑では、【 】が用いられている場合が多いようである²⁾。しかし、この括弧は文中では目立ち過ぎるので、漢字名の付記には[]を用いるのも一案ではあろう。

また、生物分野の専門家からの一般への情報発信の場において、本提案が適宜、有効に取り入れられることは極めて有益であろう。特に各種の図鑑類の記述や、動物園、植物園、博物館や資料館の説明板などでこの漢字付記が望ましいと思われる。付記された漢字によって、それら生物種になじみの薄い一般市民の理解が深まるとともに、生物一般への興味、親しみが増すことも期待できる。なお、読者対象が生物系の専門家である学術雑誌などの場合は、曖昧さがなく生物種を示すことが重要であり、学名の使用が適当な場合はあろうが、漢字付記が望ましい場合は少ないと考えられる。

謝 辞

動物名についての有益な助言をいただいた大阪市立天王寺動物園の早川篤氏に謝意を表す。

参考文献

- 1) BRH JT 生命誌研究館ホームページ「中村桂子の『ちょっと一言』 2010年11月『発見でなく開発(?)・・・について』へのお返事」
http://www.brh.co.jp/communication/forum/user_view_1ist.html
- 2) 竹下信雄(1989)フィールド・ガイドシリーズ1 日本の野鳥1, 256pp., 小学館, 東京.
- 3) NPO WETLAND NAKAIKEMI No. 42 (2011/12/1) 9 ページ記事
- 4) 川井正雄(2011)サイン入りの蝶々が舞っていた, 近畿化学工業界, 63(8), 12-13.